

妹の死

中勘助

青空文庫

今から十八年前の秋、ひとりであの島ごもりをしてたときに私は九州へかたづいてる妹が重体だという思いがけない知らせをうけとった。私は涙をうかめたけれども島を出ようとはしなかった。そのときそんな気もちでいたのである。ところが妹の容態はその後いくらか見なおして床についたままではあつたが、つぎの年の夏までもちこたえた。左にかかげる小品はその夏妹が私にあいたがつてるといふことをきいていよいよ望みがなくなつた彼女を嫁いり先へ見舞つたとき、たぶんその死後間もなくなおまざまざしい記憶と生前枕べでの手控えをたよりに思い出ぐさにもとおもつて書いておいたものである。

来てみたら妹は見るかげもなく痩せていた。前ぶれをしなかつたのでどんなに驚くだろ

うと思つたが、驚きもし喜びもするはずのところを極度の衰弱のために目にみえるほどの興奮も示し得ずに——かような不随意的な無表情はそののち私も病気で衰弱したおりに親しく経験したことである——ただひと晩じゆうほとんど眠らなかつた。妹は痩せたために顔がわりがしていた。どちらかといえば細かつた目がぱつちりとして切れがなくなり、おとなしく小さかつた口が一の字にしつかりと結ばれて、笑うと口もとに縦の深い窪みができる。蒼白く弱弱しい皮膚のうえに、それはかつて妹の容貌のうちでいちばん美しいものであつたところの柔くひいた眉がまえよりも濃くのびらかになつたようにみえる。どこといつてとりたてて目にたつのではないがすべてが尋常に人好きのするほうであつた顔になにかいい意味で技巧のかおりのする彫刻的な美しさがそわっている。——私は後にはか
らずその似顔を能面の孫次郎に見出した。妹も能が好きだつた。それゆえ彼女が私のためになんぞ骨の折れることや気のすすまぬことをしてくれたときには「御褒美だ」といつてよく能につれていつた。そんなことのために私はこの小品に 孫次郎 という表題をつけようかと思つたこともあつた——私と不意の久しぶりの顔を見あわせてから暫くして妹は「□□さんたいへんふとつたわね」

といつた。これが最初の言葉だつたかもしれない。挨拶などはしていられないほど衰えて

いたのだ。

どんなところかと思つてきたら妹はぼつつりと土塀にかこまれた陰気な家に住んでいた。病室のまえの二坪か三坪の地面にひばが四、五本ならんで、土塀のうえの瓦のすきまにっんぼ草がからからにはえている。ときどき色のうすい弁慶蟹が目をうごかしながらじわじわとはいあるく。夕がたになると無数の蜘蛛くもがひばの枝から枝へ、また軒から瓦へといそがしく巣をかける。守宮やもりがでる。そんなものが大嫌いだつた妹は枕にひつたりと頭をつけたなりまるで見えないもののように平気でそれをみている。反対の側のやや広い地面には姿もない木がばらばらと立つて、そのなかに赤い実のなる小さな木がまじっている。やっぱり無数の蜘蛛が巣をかける。精しょうりょう霊とんぼの翅はねが軒端をつたつてひかひかと光る。妹は

「私そんな島のこときいて泣いたわ」

といった。私が島にこもつていたことを彼女は最初の重体ののち、一時よほど容態がよくなつたときはじめてきかされたのだ。こういう短いひと言にさえわずかに残つた気力を一所懸命あつめなければならぬように、そして無駄をしないためにたくさん話のなかから出来るだけ大切なひとつをよりだそうとするように、ながい間をおいてぼつりぼつりと

蚊の鳴くような声でいいだすのであった。

妹には女の子があつた。まだ一つで、這つてあるく。その産のすこしまえから床につきどおしなので一度も抱いたことがない。ただ這つてあるくの頭の位置はそのままに眼の動かせる範囲内だけ眺めてることがある。子供はむかひの釜屋の夫婦が無性むしようにかわいがつてたいがい朝から借りてつて一日じゆう遊ばせている。狭い人通りのない路みちゆえ子供のはしやぐ声がよくきこえる。善い人たちらしい。

黒い蜂が蜘蛛をとりたくみにきて巧たくみに巢からとつてゆく日があつた。また蝙蝠こうもりの飛ぶ夕べがあつた。雨の日も、雷の日も。

井戸ばたへ顔を洗いにゆくと大きなざぼんの木があつて青いのがたくさんなつている。その涼しい木蔭こかげには金色をしたつがいの逞たくましい鶏たけが自分たちの領分おんぶんみたいにもならんでるが、人がゆくと雄のほうおとこが喉をならして羽根のはえた足をのさのさとおおまた大股おおまたにはこぶこぶ妹がかたづいてからはじめて上京したときにところの風のかわつてることなど話して笑いながら、盆暮れには家になるざぼんをひとつずつ知るべへくばるのだ といったが、それはこのことだつたのだ。

ある日妹は

「□□さんきつとああいうところが好きだからいってごらんさい、裏のお濠ほりのふちにたつたひとつ狭い部屋があるから」

といった。それはもと物置だったところへ畳をいれたので今でも物置なのだが、いろんなものをつめたあいだに人ならばやつと二人横になれるほどの余地がある。母屋おもやからはずつとはなれて昔のお城の濠にじかづけにたつてるので、静しずかでもあれば、珍しいも珍しい。水の幅は一町ばかり、いちめんの蓮のほかに水葵みずあおいと蒲がまかなにかごちやごちやに茂つて浮き草が敷きつめたようになってる。風の日には吹きよせられたあとに水があらわれて鮒ふなが鼻をならべてるのがみえる。白い蓮の花の咲きみちてるのはこうごうしいものである。薔つばみはさきのほうだけほんのりとあかい。陣笠をあおむけたような葉がま夏の日光を漑たえかねてゆらゆらとゆれている。巻葉も美しい。雨の日はもつとよい。雨あしのすきまなくみえるのも、蓑笠みのかさの人などゆくのも。鯉、すっぽん、鰻もたくさんいる。もとは菱くいや鶴など人をもおそれず群れてたという。私はこの面白い離れが気にいって、たびたびいつまでもはいつてるようになった。

妹は昼のうちはどうとうとしてるが夜になると頭が冴えて眠られない。そしてみんながよく寐ねてるのに自分ばかりひとり目をさましてるのが寂しく、また体も苦しいのでひとをお

こしてはむずかる。私もそばに寝てるのだが私だけはおこそうとしない。それは私がたえ心ではどう思おうとも手を出してまではなにひとつしてやったためしもなく、する気づかいもないからで、——この傾向はいろいろな理由からその後非常にかわった——私もそれで平気だし、妹のほうでも別段ものたりなく思うでもない。——彼女が私に求めて、そして得たのはこの胸であった。手ではなかった——夜なかに妹があんまりじれたり悶えたりすると私は目をさましてひとりで笑う。妹は苦しいときにはこのへんの言葉で きついきつい といつて訴える。自分の苦痛をわかってほしいばかりに永い間に使いなれたのであろう。

妹は大儀だもので用事のほかにはよつほど気分のいいときでもなければそばにいる私にも話しかけない。彼女はあるとき

「吐はきがくるとすぐ□□さんが見に来てくれるから嬉しくて……」

とそれをなかば私に感謝するように、なかば××さん——つれあい——に告げるようにいった。妹がなんにもたべられず、強いてたべる一杯の食事をさえもどしてしまうので、私は吐がくると食べたものが出てしまったか、おりあつてるかと気にかけてのぞいてみるからである。また××さんの留守に私がほかの部屋で仕事をしてると

「すまないけれど寂しいからここへきてちょうだいな」

という。私は「銀の匙^{さじ}」の原稿をもつてそばへいつて机にむかう。妹はまじまじと私の顔をみたり、うとうととらしくそうに眠ったりする。彼女がながいわずらいのあいだにあいたいといったのは母と私だけだそうだ。そうして……

「私こんなにして二、三日うちに死ぬんじゃないかしらん。でももうみんなあいたい人にあつたからいい」

そんなこともいった。そうかとおもえば はやく丈夫になりたい といったり、あんまり苦しくなれば 死んだほうがましだ ともいう。

「家がまわる。ふわふわして体があるかないかわからない」

そんなときに妹はいちばんいやがる。頭がぼーっとしてしまって、過去も、現在も、未来も、自分も、自分のねてる位置も、ねてる理由も、なにかもわからず、一瞬間まえのことも夢のように遠くなつて、ただそのようにわからなくなつたということだけがわかるのである。彼女ははやくわかりたい、その半死半生の状態からのがれたいとあせつて悶^{もた}えたり泣いたりする。しかしまつたく経験のない私にはその肉体的であるよりはむしろ精神的なものらしい悩みが充分にわからない。

わりあい気分がいい日、私と二人きりのときに妹はこんな話をした。それは去年のことだった。こちらへきてからはじめて雪がふった。ひさしく雪をみなかったもので床とこについていながら嬉しくて嬉しくて、たべたくてたべたくてしかたがなかったので、叱られるのをやつと頼んで松の葉につもつたのをとつてもらつてたべた。妹はそれを話すときに思いだしても嬉しいらしく子供みたいにいそいそとした顔をした。彼女は　でもすぐとけてしまった　といった。

病気があまりながびくので妹は自分でも入院してみようかという気になり、皆もすすめていよいよそうときまった。家を出るときに

「こんだ退院するときは玄関まで歩いてこられるかしらん」

なぞといった。もうじき死ぬのだということを××さんからきいて自分一人だけ知つた私はそんなことをいわれるのがつらかった。私は病室までつきそつていった。帰るとき妹は

「毎日きてちょうだいよ」

といった。

私は毎日病院へいってなにをするでもなく寝台のそばに腰をかけている。そのあいだに

さきで気がむいたときひと言かふた言話をする。入院のときの運動がさわつたとみえて容態がいつそう悪くなり、頭が毎日のようにぼんやりして心細がる。妹は自分がどういう位置におかれてるのかも、蒲団ふとんや寝台のあるなしさえもわからない。そうして食事のときにもいつものとおりの体の位置でいつものとおりに食器を出されないと箸のとりかたもわからずに食器を見つめて考えている。そんな風なのでひとしお寂しがって私がゆくと

「寂しいからそばへよつて手をもつてちょうだい」

ということがよくある。そんなとき私は一日手をとって顔をながめている。……妹は「よつぽど胃が悪いのね」

といった。もうじき死ぬというほど衰弱してるのだとも知らないで、彼女は胸のへんにひどい衰弱や、血液の不純になった場合の面白くない徴候とされる無数の皮下出血をおこしている。

死ぬ二日ばかりまえのことだった。……私にすぐきてほしいというのでいつてみたら誰もいないでひとりつきりぽつねんとねていた。

「どうした」

といつてそばへよつたら

「寂しいから手を握って」

といって手をだした。その前日だったか 入院してからはじめて頭がはっきりしてなんでもよくわかる といって非常に喜んでたが、この日も気分がいいといつていつになく話などした。ぼんやりすると死にたがるのがはつきりすればやっぱりよくなりたがるのを自分でもおかしいといつて笑った。妹は……ぐちをこぼした。それから もうすこしうえへ体をあげて というのでそうつと抱えてくれた枕のほうへ押しあげようとしたらすこし強くゆれたためにせつかく冴えてた頭がまた朦朧としてしまった。けれども彼女はちよつと笑顔を見せて、はじめて私にそんな世話をしてもらうのが嬉しいようなきまりが悪いような様子をした。それがあとにも先にも私に手をくわだして世話をしやうとした一度である。枕もとには見舞にもらった西洋水仙の鉢植えが置いてあつたが、あれほど花が好きだった妹ももうそれをみようともしなかつた。私を買ってきて壁にとめた版面にもただ きれいだこと と気のないひと言をくわえただけだった。窓のまえにはポプラきょうちくとうと 夾竹桃きょうちくとうの若木があつて幾羽かの鳩がよく餌をひろつていた。天神様からきたのだろう。

たしかこのことのある翌翌日の朝だった。病院から急の迎いがきたのでとりあえずいった。××さんは海峡をこえて往診に出た留守だった。いつもおいてゆかれるのをいやが

つてひきとめるのがその日は 気分がいいから といつて承知したのだそうだ。で、つきそいの者だけしかいなかった。妹は唇の色もなくなっていた。私と母の顔を見て

「苦しい。唇をしめして」

と虫のようにいった。起きあがって坐つてるうちにうつぶせに倒れて脈が非常に悪くなつたのをようやく注射でとりとめたのだという。私は 予期した時がきたな と思つた。注射のためにちよつと氣力をとりかえしたとき妹は

「私もう今日はごはんたべない」

といった。いつも叱られて強いて食事をさせられるのだ。義理の父母も釜屋のかみさんもきた。乳母は子供を抱いてきた。妹は涙ぐんであわてる人たちを平氣に見まわしていた。そして自分の背中のほうに子供を抱いて立つてる乳母に

「こつちへこなければ見えやしない」

といった。釜屋のかみさんが乳母の手から子供をうけとつてみせた。妹はただひと目みたばかりで平氣な顔をしていた。彼女は苦しくなるとうわことみたいにいるんなことをいつたがそれは決してうわことではなかった。いつのまにか目をとじてしまつていながら先生のいるいないをよくききわけて

「頭ばかりはつきりしてなんにもわかりませんからもう……」
といった。また訴えるように義理の母を呼んで

「お母様苦しい」

といった。妹はしんからその母に頼っていた。お母様は涙をこぼして

「ああ　ああ　もうじきらくになるけんの」

といつて背中をさすった。妹は目をとじたままでそのせつない、頼りない、奇怪な悩みを
どうぞして皆にわからせてはやくどうかにかしてもらいたいというように苦しいなかに言葉
に力をいれてくりかえしくりかえしこんなことをいった。

「いくら息をしようと思ってもできなくなってしまう。どうしたらいいんでしょう。ほら、
いくらしようと思っても……」

そういううちにも幾度も息がとまりかける、一所懸命力をいれて吸いこもうとするのだ
が。

「誰か教えてくださらないかしらん。どうしても息ができなくなってしまう」
しまいにはうかさされたように

「誰か息をこしらえてちょうだい」

といった。また

「なにかいってはすぐ忘れてしまうから始終水を口へいれてて、そのあいだだけわかるから」

ともいった。いつもながらこういう場合ほど我々の無能がよくあらわれることはない。私たちは死神にいいように料理されてる病人をとりまいてしんから手もち不沙汰ぶさたに控えている。私は自分をはじめ人たちを見まわして思わずふきだしそうになった。私は立って窓のそばへいって外を眺めていた。ちようど夕だちがあがって雲の塊がふわふわと飛んでいった。やがて暑い日になって強い風がおさまった。

そんなにしてなんべんも息がとまりかかると注射でとりとめとりとめ三時ごろにもなったが××さんは帰ってこなかった。しまいには病院の入口から病室まであきあきするほど長い廊下のところどころに人が立って××さんの姿がみえると同時に出来るだけはやく病室へしらせる手筈てはずになった。そこへやつとのことで××さんが帰ってきた。私は気がなくになった。あとはただもう死ぬだけのことだ。××さんが帰ったときには目はあかかった。××さんが手をとって

「わかるか」

といたらうなずいて

「声でわかる」

といった。——誰か泣いた——注射などしてらうちに不意にぱちりと目をあいた。そして皆の顔なぞを見まわしてにこにこしながら

「またわかるようになった」

といった。妹はそのときからもうちつとも肉体的の苦痛を感じなかった。——モヒの注射をしたのではなかったかと今思う——顔に血のけも出てきた。そして××さんに手をとられてなにか問われるままにいつもの苦痛のないときのおりに話していた。しかしごく緩慢な周期をもって意識の明瞭なときと不明瞭なときが交互にくるのを自分でも気がついてる様子だった。その意識の不明瞭なときには脈も呼吸も変調を呈してのだった。明暗の周期が次第に速くなって一步一步最後に近づいてきた。私もちよいと手をとってみたがいつのまにか先が蒼白に冷たくなっていた。とうとう妹はなにかいってるうちに あ あ あー と息をひいて五、六秒のあいだ呼吸がとまってたが、見てるうちにちようどうなされた者が目をさますときのようにはっと目をあいて あー と溜息をし、また息をふきかえして私たちの顔をみてさも嬉しそうになっこり笑った。

「どうした。嬉しいか」

××さんがいったら軽くうなずいて

「またわかつてきた」

といった。私は いよいよ死んだ と思ったのが生きかえたので不思議な気もちがした。妹は泣いてる母や皆の顔をきよんとして見まわしていた。××さんと話してるあいだにときどきじつと私のところに瞳がとまることがあった。眼の色がうすくなってきた。私は まだ見えるかしら とおもってすこしそばへよって

「みえるか」

といったらかすかにほほえんですこしうなずいた。私はこのいいいようなない静な不思議な様子をよく見ようと思つて、寝台にかた^{ひじ}脇をつきながら刻々弱つてゆく彼女を仔細^{しさい}に観察して要所要所を手帳にかきとめた。妹は絶えず脈をとつてる××さんと話してるうちしまいに

「もうあなたと話すのもこれぎりかもしれなくてよ、すぐわからなくなるんですもの。ほら………」

そういつてこつりと息をとめて眼をとじてしまった。××さんは待ちかまえていて注射

をする。一言もものをいう者が無い。静である。そこには××さんと私と二人の母のほか誰もいなかった。眼をとじた顔を見つめて待つてるとやがて息をふきかえず。いよいよ頼みずくなになってきたので××さんが

「なにかいいのこすことはないか」

といったらわずかに笑みをうかめてうなずいた。もう死ぬのはなんともなかったのかもしれない。よくいったように死にたかつたのかもしれない。××さんは床に顔をおしつけてたまらなそうに泣いた。……妹の瞳孔は散大してなにも見えないらしかったがその眼もとうとうつぶってしまった。それでもなにかいうらしく唇をうごかして自分の顔のまえにかきさぐるような手つきをした。が、間もなく息をひきとつた。最後の息というものはいくたび見ても最後らしく、そしてよそ目にはせつなそうなものである。皆はまわりによつて泣いた。私はそういう場合の私の習慣？ にしたがって涙はひとつもこぼさなかった。そうして彼女の死のためにひとに忘れられてからからになつてゐる西洋海^{かいとう}棠に水をかけてやった。鳩がいつものとおり餌をひろいにきていた。晴れて暑い夕べであつた。名物の夕なぎがはじまってポプラーも夾竹桃も細工物のように静にたつていた。

屍^{しかい}体を家にはこんで座敷にねせておく。こうなると私はいつも奇異な気もちに襲われる。

この陶物すえものの人形よこたみたい横よこたわつてるものをみて　これはいったいなんだろう　と思う。
 釜屋おやじの親仁おやじさんは子供をつれてきて

「これみいさいや。お母様はなんまみ様にならつしやつたが」
 という。子供はけろりとして眺めている。

みんなそれぞれの用事にまぎれてるので屍体が床のまえにおきはなされている。で、寂しがつて私をよんだことなど思いだしてそばに坐っている。

翌日入棺。土地の習いでみんなして南無阿弥陀仏を紙にかいて入れてやる。釜屋の親仁さんは

「私もいれさせていただきましうわい」

といつて書いていれる。身うちの者だけは手足の爪をきつて紙に包んでいれる。平生かんし癩かんし性ように爪をきる私にはとうろうにも爪がない。で、申訳ばかりけずつていれる。蒼白く硬直して窮屈な棺のなかに合掌してる死骸をふとみればやつぱり妹のような気もする。この手は昨日まで　寂しいから　といつて私にさしだしたそれにちがいない。夜、火葬場へゆく。あくる朝はやく××さんと壺をもつて骨をひろいにゆく。隠坊おんぼうが目塗めぬりの土をばらばらとはぎおとして鉄の扉をあける。鉄板のうえに砕けた骨が灰にまぎつてるのを荒神こうじんぼうき箒

に長い柄をつけたようなものでかきだして扱えりわけける。焼き場もりの男は窯かまの後ろの口へまわって

「これだけむこうに落ちとりましたで」

と頭蓋骨のつぎめからはなれたのを二、三枚拾ってきた。私たちは灰のなかから、これが肋骨、これが椎骨、大腿骨、なぞとひとつひとついじってみては壺にいれる。大きなのはからりと、小さなのはちりちりと音がする。骨のなかに黒ずんだのがあるのを焼き場もりの男は

「脂などがあるとどうしてもこうなります」

といつてつまみだしてみせる。そばで隠坊が骨の粉をふるいはじめたので灰かぐらももうとたつ。私たちはしばらく外へ出る。海には——火葬場は海岸にあつた——玄海島、この島、鹿の島などというのがみえる。沖のほうに海の中道なかつちといつて長くながつきでた砂洲がある。舟がすきな妹はそこへゆきたがつたのでいつかつれてゆくはずだったのだそうだ。ふるいわけられたなかからまたいくつかの歯をひろいだす。壺が小さくてはいりきらないのを焼き場もりの男が上からおしつけて骨をみじやくので大きなのととりかえる。

つぎの朝庭の赤い実のなる木に蟬のぬけ殻があつたのをよくみればそばにぬけたばかりのみんまんがじつと休んでいた。どこもかしこもまだみずみずしくうすい色をして、翅はねなど白珊瑚と翡翠ひすいの骨組に水晶をのべてはつたようなのが露にぬれてしつとりとしている。

……

夜。葬式。寺の墓地は広くて大鳥毛みたいな形をした銀杏いちようの大木が五、六本まつ黒にならんでいた。妹の墓は実をもつたはぜの木のあいだにたてられた。

妹は二十三だった。面影は十七年ものながいあいだいつも昨日のように鮮あざやかにのこつて、そのままに私が年をとるだけ若く子供らしくなつていった。その面影を目に浮べながら私は筆をとつた。そうしてこの小品を書きおえるまでにいくたびも筆をおいてもすれば溢あふれそうになる涙をとめなければならなかった。私は今にして自分がいかに深く彼女を愛してたかを知つた。

明治四十五年夏

昭和三年

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆99 哀」作品社

1991（平成3）年1月25日第1刷発行

底本の親本：「中勘助随筆集」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年6月

※誤植を疑った箇所を、底本の親本の表記にそって、あらためました。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

妹の死

中勸助

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>